

佳作

組踊「重陽の月」

南風原 貴哉

(はじめに)

中国明王朝の永楽四年（西暦一四〇六年）、大和では、応永十三年將軍足利義持の時代、南海の琉球国では未だ群雄割拠の時代で、三山が鼎立し相争っていました。

その頃、琉球国南山の一角、佐敷上城から兵を起こしたひとりの男が、父尚思紹とともに三山を平定し、王都を浦添の地から首里に遷都し、琉球王朝の象徴ともいえる首里城を築城しました。その後、五世紀近くに及んだ第一尚氏、第二尚氏王統の礎を築き上げた男が、佐敷小按司

と呼ばれた一代の英傑尚巴志であります。

尚巴志は、冊封による中国との進貢貿易をはじめ、日本、朝鮮、東南アジアとの交易を活発に展開し、いわゆる琉球の「大交易時代」の幕開けをした人物でもあります。

ところが、尚思紹、尚巴志父子二代にわたる三十四年の治世から、三代尚忠、四代尚思達、五代尚金福、そして、六代尚泰久王へと王位は目まぐるしく継承され、やがて終焉の時が近づいて来ます。三代尚忠から六代尚泰久まで僅かに二十一年。第一尚王統最後の王位継承者となった七代尚徳王の在位の、天順五年から成化五年までの九年を含めても、第一尚氏王統は七代で、わずかに半世紀を超える六十二年という、短命な王統に終わりました。そして、王位は次の王統となる第二尚王統に継がれ、初代尚円王となった内間御鎖金丸の手中に、奪い取られてしまいました。

その間の、第一尚王統五代の尚金福王の王位継承をめぐる内紛は、

叔父の布里と甥の志魯が互いに譲らず、骨肉相食む争いとなりました。その布里、志魯の騒乱がもたらした悲惨な結末は、首里城を全焼し、叔父、甥の二人は、ともに命を落してしまいました。

そして、第一尚王統六代目の王位は、尚巴志王の七男で越来城の城主であった越来王子尚泰久に継承されることになります。王位に就いた尚泰久は、王統崩壊の危機を回避するため、いちはやく首里城を再建しました。同時に、多くの寺院を建立し、梵鐘を鑄造させ、国家と民心の安寧を願う仏教の普及に意を尽くしました。また、再建された首里城正殿には、「万国津梁の鐘」と呼ばれている梵鐘が掛けられました。

しかし、順風満帆に見えた尚泰久王の時代にも、王舅の中城護佐丸と、王婿の勝連阿摩和利の乱や、勝連に嫁いだ百十踏揚王女の首里への帰城。付き人役であった大城賢勇こと、鬼大城との再婚と離別などがあるなかで、国状も一筋縄には行きませんでした。

そのころ、尚泰久王が越来座喜味城主の時代から、尚泰久王の側近

として使えた聡明な二人の若者、龍魁と平田里之子虎千代がいました。龍魁はさきの国相懐機からも目を掛けられていた唐榮の逸材です。平田虎千代の出自も、尚思紹、尚巴志王の側近として仕えてきた名門の家柄でした。王女の真乙樽の許婚は、父王尚泰久が決めた平田里之子虎千代でした。ところが、王女真乙は越来時代から龍魁に想いを寄せて苦悩していました。姉の王女百十踏揚の去就のすべてを、見て来た妹の心中は尚更のことでした。

さてこの物語は、その時代の首里城内を背景に、虚構の人物、王女真乙樽、龍魁、平田虎千代、乳母などを登場させて、フィクションの悲恋物語として創作しました。

登場人物

王女真乙樽

（尚泰久王の娘）

平田里之子虎千代（王女の許婚）

龍魁 (王女が心を寄せる人物)

乳母 (王女の乳母)

侍女 1 (王女の侍女)

侍女 2 (〃〃)

警護役人比嘉 (城内警護の役人)

下役人外間 (警護の下役人)

下役人湧田 (〃〃)

時 一四五八年(明朝天順二年)秋

場所 首里王城内

《第一場》

拍子木で幕が上がる、舞台は暗転。

「作田節の歌持」が荘重にながれる首里城内の西のアザナ。(舞台奥に低い山台) 今しも、沈む太陽が西の空を茜色に染め、静かに暮れなずむ秋の夕暮れ、心地よい夕風に虫の声が聞こえる。やがて、琉球古典曲「ながらた節」の琴の演奏が静かにながれる。満ちてくる九日の月明りに照らされた西のアザナ、明人服の龍魁が、首里の城下や遠く那覇の港を眺めるように、後向きに立っている。「ながらた節」の琴の音が静かに流れている。

(上手から王女真乙樽が登場すると、琴の音やみ台詞となる)

真乙樽 今出る我身や

《ナマンジル ワンヤ..登場した私は》

王女真乙樽。

《ウミニナイビ マオトウダル..王女の真乙樽。》

按司加那志ともに

《アジガナシ トウムニ…父国王とともに》

座喜味をて暮らち、

《ザチミヲウテイ クラチ…座喜味の城で暮らし、》

夢に読谷山

《ユミニー ユンタンザ…夢の中では読谷山の事を》

未に思出すさ。

《ナマニ ウビジャスサ…いまだに思い出します。》

金橋、多武喜

《カニハシ タブキ…金橋と多武喜》

二人の兄加那志。

《タキヌ シザガナシ…二人の兄上様方のこと。》

踏揚御姉も

《フミアガリ ンミイーン…百十踏揚り御姉様とも》

野山飛び跳ねて、

《ヌヤマ トウビハニテイ…野山を駆け跳ねて、》

ともに遊だすや

《トウムニ アスイダシヤ…一緒に遊んだのは》

昨日のごとあすが、

《チヌウヌゴウトウアスイガ…つい昨日のことの

様ですが、》

繰り戻しならぬ

《クキムドウシ ナラン…もはや、元に戻す事の

出来ない》

昔またなため。

《ンカシマタ ナタミ…遠い昔になってしまった。》

此の頃のこと

《クヌグルヌ クトウニ…近ごろになって》

一人肝やむし、

《フィチュキ ちムヤムシ…一人で悩んでいるのは、親のなずけたる

《ウヤヌ ナズイキタル…父国王が決めて婚約した》
里やいめなぎな、

《サトウヤ イメナギナ…お方がありながら》
義理背き我肝

《シリスムチ ワチム…私の心は、義理の道に背き》

余所に迷て。

《ユスニ マユティ…他の男性に心乱れている事です。》

真乙女（つらね）

朝夕拝みぼしや

《アサユ フウガミブシャ…朝夕お逢いたくて

肝あまち居もの

《チムアマジ フウムヌ…心落ちつかずに居ます、

恋の花ごろも

《クキヌ ハナグルム…どうか恋の花衣に》

染めてたばうれ

《スミティ タボリ…わたしを染めてください。》

音曲・「さあさあ節」 （王女真乙樽の踊り）

義理の責め縄も

《シリヌ シミナワン…義理という責め苦の縄も

朽ちて自由なゆる》

《クチテイ ジユナユル…朽ち果てて解放される、
世界あらは遣らせ

《シケアラワ ヤラシ…そんな世界が有れば遣せて下さい》
御月がなし

《ウツイチ ガナシ…どうか御月さま。》

（龍魁は王女真乙樽に気付き山台から降り、真乙女に近づく）

龍 魁（つらね）

あけやう籬内の

《アキヨ マシウチヌ…可愛そうに籬垣の内で》

忍び草一枝

《シヌビグサ チユキダ…耐え忍ぶ一枝の草花。》

苔で露待ちゆる

《ツイブデイ ツイユマチユル…蕾のまままで露を待つ》

花の哀さ

《ハナヌ カナサ…花の切なさよ。》

音曲・「白鳥節」 （王女真乙樽と龍魁の踊り）

浮世しがらみや

《ウチユ シガラミヤ…浮世のしがらみは》

無情の蔦かずら

《ムジヨヌ ツイタカズイラ…無情な蔦かずらのように、》

里が志情けに

《サトウガ シナサキニ…あの御方の志情けにも》

絡らで巻きゆさ

《カラデイ マチュサ…絡み巻き付いてしまう。》

（踊り終わると台詞）

真乙樽 やあ、龍魁よ。

《ヤア、リュウカイユ。…ねえ、龍魁。》

哀れこの二人

《アワリ クヌフタキ…可愛そうな此の二人は》

如何有れば済みゆが。

《イチチャアリバ シミュガ…如何すれば良いのですか。》

龍魁 され、御王女の前。

《サリ、ウミナキビヌメー。…さあ、王女さま。》

御肝穩やかに

《ウジム ウダヤカニ…御心をおだやかに》

御持ちめしやうれ。

《ウムチミシヨリ。…お持ちください。》

御主加那志御兄

《ウシユガナシ ウミスイザ…国王様の御兄君》

王子布里さまと、

《ヲオージ フリサマトウ、…尚布里王子様と、》

尚金福王の

《シヨーキンプクヲーヌ…御兄君の先代国王尚金福様の》

嫡子志魯さまが、

《チャクシ シルサマガ、…御嫡子の尚志魯様が、》

争たるために

《アラスタル タミニニ…王位継承の一件での争いで
焼けて失なたる、

《ヤキテイ ウシナタル、…焼失しまった》
御城も今や

《ウグスイクン ナマヤ…首里の御城も今では》
見事建て直ち。

《ミグトウ タテイノーチ、…見事に再建され、》
民草のこころ

《タミクサヌ ククル…人々の荒んだ心も》
乱れ世も鎮め、

《ミダリユン シヅィミ…乱れた世の中も鎮まり》
御国の安泰

《ウクニヌ アンタキ…御国の安泰を》
願て鑄造らちやる、

《ニガテイ チユクラチャル、…祈願して鑄造させた、》
万国津梁の

《バンクク シンリヨウヌ…万国津梁の》
梵鐘もまた掛けて、

《カニンマタ カキテイ、…梵鐘も正殿に掛けられ、》
御仏の御加護

《ミフトウキヌ ウカグ…御仏の御加護により》
栄て行く御代に、

《サカテイイク ミユニ、…栄えて行く御代です。》

義理背く道の

《シリスムク ミチヌ…今、義理に背くような行動が》
許しあやべらん。

《ユルシ アヤビラン。…許される道理はありません。》

真乙樽 無常のこの世界に

《ムジョヌ クヌシケニ…無常のこの世界で》

誰たよて我身や、

《タルタユティ ワミヤ、…私は、だれを頼りに、》

永らえて行きゆが

《ナガラキティ イチユガ…生きて行けば良いのですか》

寄せてたばうれ。

《ユシティ タボリ。…どうか教えてください。》

音曲・「述懐節」 （真乙樽の踊り、下句から、龍魁も仕方なく絡むような体）

恨めしやこの身

《ウラミシヤヤ クヌミ…恨めしいのは此の身です》

義理につながれて

《ジリニ ツィナガリティ…義理のしがらみで繋がれ、》

思切りもならぬ

《ウミチリン ナラン…思いを断ち切る事も出来ず》

我肝あまぢ

《ワチム アマジ…私の心は戸惑うばかりです。》

（踊りが終わると、真乙樽、龍魁二人は山台の上手奥に退場）

《 第二場 》

乳母が侍女二人を伴い下手から登場。乳母を中心にやや暗転の中を

琉歌を神歌（おもろ風）な、歌のリズムに合わせて出て来る。

おもろ歌 （臼太鼓の太鼓のリズム）

首里森の御嶽

《シユキムキヌ ウタキ…首里森御嶽の》

まさしせぢ御神

《マサシ シヂウカミ…霊験あらたかな神様に》

天ぢやなし御果報

《ティンジャナシグカフウ…国王様の御果報を》

御願ひ拝ま。

《ウニゲ ヲウガマ…御祈願いたします。》

うれまた、

《ウリマタ…それにまた、》

清らさ生れたる

《チュラサ ンマリタル…清くお生まれになった》

愛させぢ蝶

《カナサ シヂハビル…愛しい蝶のような真乙樽王女》

根すら栄え拝ま

《ニスラ サケヲウガマ…根元から枝先まで総ての栄え》

をなりおせぢ。

《ヲウナキ ウシジ…をなり神様へのお願いです。》

（乳母と侍女座り、首里森御嶽「上手先」に向き祈るように台詞を唱える。乳母の後で侍女の二人もかき合せ合掌する）

乳母（台詞）（神拝みの調子で唱える）

うーとーとう、

《ウートートウ…尊い神さま。》

王女ぬめーぬ

《ウミナイビヌメーヌ…私は王女様の》

乳母だやべる。

《チイアン ダヤビル…乳母でございます。》

今年の年時

《クトウシヌ ニンドウチ…今年の年廻りの》

午年嘉かる日、

《ンマドウシ ユカルファイ…午歳の良き日》

九月の九日

《クングワツイヌ クニチ…九月の九日。》

菊酒の御取替え。

《チクザキヌウトウキケー…菊酒の御替えをして》

御尊あみしえーる

《マササ アミシエール…尊くあられる》

首里森の神様、

《シュキムキヌ ウカミ…首里森の神さま》

東世の御太陽

《アガリユヌ ウテイダ…東世御陽様》

御月様加那志、

《ウチチユーム ガナシ…そして御月様。》

今が世から後世

《イマガユカラ アトウユ…この世からあの世までの》

加利吉の栄え、

《カリユシヌ サカキ…嘉例吉の栄え。》

真乙樽加奈志

《マウトウダル ガナシ…王女真乙樽さまの》

立身よ願て、

《リツシンユ ニガテイ、..成長と栄達を願い、
玉の盃に

《タマヌサカヅイチニ..玉盃の御神酒に》

菊の葉ゆ浮けて、

《ツイクヌフワユ ウキテイ、..菊の葉を浮かせ、
清ら御拝しゃびん

《チュラヲウガミ シャビン..清く祈願致します》
御受取りしえーびり。

《ウキトウミ シェービリ..御受け取り下さい。》
うーとーとう、

《ウーとーとウ..ああ、尊い神様》
うーとーとう。

《ウーとーとウ..真に尊いことです。》

（乳母の祈りが終わる頃、上手奥から真乙樽と龍魁が登場する。乳母も真乙樽と龍魁ともに驚く。龍魁は琉装に着替えている。その場の様子から二人の仲を察した乳母。真乙樽は驚きその場を取り繕う体。乳母は只ならぬ場面を目撃し、王女の常軌を逸した行為に激怒し、王女に詰め寄る。複雑な心境で見守る龍魁。ただ、おろおろする侍女たち）

乳 母（つらね）

さても、さてこれや

《サティム サティクリヤ..さてさて。此れは》
かなし王女様。

《カナシ ウミナイビ..愛しい王女さま。》
肝迷いめしやうち

《チムマユキ ミシヨチ..お気は確かですか》

御神忘しめしやうち、

《ウカミ ワシミシヨチ…神様を忘れたのですか。》
今日の嘉かる日に

《チューヌ ユカルフィニ…今日の良き日》
今日のまさる日に、

《チューヌ マサルフィニ…今日の優る日に、》
首里森の御神

《シュキムキヌ ウカミ…首里森の神さま》
御月様加那志、

《ウチチューメ ガナシ…気高いお月様に、》
玉の盃に

《タマヌ サカヅイチニ…玉盃の御神酒に》
菊の花浮けて、

《チクヌハナ ウキテイ…菊の花を浮かべ、》

思姉に代わて

《ウンミーニ カワテイ…姉上様に代わつて》
やがて立身の、

《ヤガテイ リツシンヌ…やがて栄達を…と。》
御神に願立てる

《カミニー グワンタテイル…神様への私の祈願》

こころ知らね。

《ククル シラニ…私の心を知らないのですか。》

真乙樽

やあ、乳母よ。

《ヤア、チーアンユ…ねえ、乳母よ。》

あだし世に生まれ

《アダシユニ ンマリ…空しい此の世に生まれ
たるよ恨みよが、

《タルユ ウラミユガ…誰を恨むことも無い。》
踏揚り思姉や

《フミアガリ ンミヤ…百十踏揚の姉上は》
女身の哀れ、

《フィナグミノ アワリ…女の身として可哀相でした。》
我身やわん俣に

《ワンヤ ワンママニ…私は自分の意志で》
生ち見ぼしや。

《イチチ ミブシャ…生きて見たいのです。》

乳 母 やあ、やあ。

《ヤア、ヤア…これは、これは。》

肝迷いめしやうな

《チムマユキ ミシヨナ…御心を確とお持ちください》

肝あまじめしやうな。

《チムアマジ ミシヨナ…気が動転してはいけません。》

愛し王女様

《カナシ ウミナイビ…愛しい王女様》

御神忘れしやうな

《ウカミ ワシミシヨナ…神を忘れてはいけません》

元祖粗相めしやうな。

《グワンス スソミシヨナ…御先祖様を粗末には

出来ません。》

天加那志御肝

《ティンジャナシ ウジム…父国王様の御心を》

徒になちからや、

《アダニ ナチカラヤ…徒にしてしまつては》
里が立身の

《サトウガ リツシンヌ…許婚の虎千代さまのご出世》
是からの先も。

《クリカラヌ サチン…これから先の事もお考え下さい。》
女身の果報も

《フィナグミニヌ クワフン…女としての果報も》
幸せも捨てて、

《シアワシン スイテイテイ…女の幸せも捨てて、》
無常のこの世界に

《ムジヨヌ クヌシケニ…無常のこの世界で》
如何し暮らしやべが。

《イチヤシ クラシャビガ…どの様にして暮らせますか。》
心落つけて

《ククル ウテイツイキテイ…心を落ちくけて》

真肝取り戻ち、

《マジム トウキムドウチ…真の心を取り戻し》

人の道歩で

《ヒイトウヌミチ アユデイ…人としての道を歩み》

神の道あがめ、

《カミヌミチ アガミ…神の道を崇め、》

万人の鏡

《ウマンチュヌ カガミ…人々の鏡となり》

元祖光らすし、

《グワンス フィカラスシ…ご先祖の徳を輝かすこと。》

是ど天加那志

《クリドゥ テインジャナシ…これが父国王様の》

御願またやれば

《オニゲマタ ヤリバ…願いであれば》
親加那志御心

《オヤガナシ ククル…父上様の御心が》
徒になち済まぬ。

《アダニ ナチスイマン…徒になつてはなりません。》

真乙樽 やあ、乳母よ。

《ヤア、チーアンユ…ねえ、乳母よ。》

やあ、龍魁よ。

《ヤア、リュウカイユ…ねえ、龍魁よ。》

如何あればこの身

《イチャアリバ クヌミ…如何すれば此の身は》

我自由またなゆが、

《ワジユマタ ナユガ…自由になれるのですか。》

義理の鉄鎖

《シリヌ カニクサリ…義理と言う鉄の鎖を》

解きやならね。

《トウチャ ナラニ…解くことは出来ないのですか。》

やあ、乳母よ、

《ヤア、チーアンユ…ねえ、乳母よ。》

やあ、龍魁よ。

《ヤア、リュウカイユ…ねえ、龍魁よ。》

乳母 やあ、やあ。

《ヤアー ヤア…さあ、さあ。》

此処に居て若しか

《クマニヲウテイ ムシカ…此処に居るところを若しも》

余所の目にかから、

《ユスヌミニー カカラ…他人の目に留まって》

城内の口舌や

《シルウチヌ クチシバヤ…城内の噂になると》

かまらしゃよあれば、

《カマラサユ アリバ…厄介なことになり、》

一大事よでむの

《イチデジユ デムヌ…大変なことになります》

直ぐに戻めしやうれ。

《スイグニ ムドウミシヨリ…直ぐにお戻りください。》

我身や先なやり

《ワミヤ サチナヤキ…私はひと足先に戻り》

御待ちしやべん。

《ウマチ シャビン…お待ちしております。》

（乳母、真乙樽と山台の上の龍魁を睨み付け、侍女を促がし下手に退場）

音曲・「子持節」

九重の籬に

《ククヌキヌ マシニ…九重の籬内で》

ただ蕾で待ちゆめ

《タダ ツイブディマチュミ…ただ蕾んで待つのですか》

情け花咲かす

《ナサキバナ サカス…情けの花を咲かす》

真露たばうれ

《マツイユ タボリ…真の露が欲しい》

（乳母と侍女たちが退場すると、真乙樽静かに龍魁の方に近づき身をよせる。下句から二人は動き、真乙樽は山台を降り上手に、琉魁は下手に退場）

《 第 三 場 》

暗くなつた首里城内を、城中警護の役人外間と湧田の二人が上手から「早口説の歌持」に合わせて登場。白鉢巻にたすき掛けで六尺棒を持ち、外間は右手に強盗提灯（がんどう）を持つている。場所の設定は、第一場、第二場と同じ。

外 間 是や警護夜廻り

《クリヤ キイグユマワキ…これは、城内警護の夜廻り役》

外間に湧田。

《フカマニ ワクタ…外間と湧田。》

やあ、湧田

《ヤア、ワクタ…おい、湧田。》

城内の夜廻り、

《シルウチヌ ユマワリ…今日の城内の夜廻り》

異変ごと無らぬ

《イフィングトウ ネラン…変わった事もなく》

騒ぎごと無らぬ。

《サワジグトウ ネラン…騒がしい事もない。》

暫し此処をとて

《シバシ クマヲウトウテイ…暫らく此処で》

憩こてから巡ら。

《ユクテイカラ ミグラ…休んでから廻ろう。》

湧田 あんやさ、外間。

《アンヤサ フカマ…そうだな外間。》

此処に腰ゆこて

《クマニ クシユクテイ…此処で腰を休め》

涼風に汗よ入れら

《スイダカジニ アシユイリラ…涼風にあたり汗を拭こう。》

あの百浦添見れば

《アヌムンダスイ ミリバ…あの正殿を見ると》

かわて思出すさ、

《カワテイ ウビジャスサ…あらためて思い出すよ。》

先の天加那志

《サチヌ テインジャナシ…先の国王様の》

御弟布里さまと、

《ウツトウ フリサマトウ…御弟君の布里様と》

御太子志魯さまの

《グテーシ シルサマヌ…御皇子の志魯様が》

争たる騒乱。

《アラスタル サワジ…相争った騒乱のことだ。》

外間 其の為に今の

《ウヌタミニ ナマヌ…その騒乱の為に今の》

天加那志拝で、

《ティンジャナシ ヲウガデイ…国王様を拝する事になり、》

御国安泰に

《ウクニ アンタイニ…御国も安泰に》

治まとる際に、

《ヲウサマトウル チワニ…治まっている時に、》

中城護佐丸と

《ナカグスク グサマルトウ…中城の護佐丸按司と》

勝連の阿麻和利、

《カツイリンヌ アマワリ…勝連按司の阿麻和利、》

身内相討ちゆる

《ミウチ アキウチュル…国王の親族が相討つ》

戦また起こて、

《イクサマタ ウクテイ…戦まで起こつた。》

漸くに鎮め

《ヨウヤクニ シズイミ…今は漸く鎮まり》

落着よしやすが。

《ラクチャクユ シヤスイガ…落ち着いてはいるが。》

只ならぬ噂

《タダナラン ウワサ…聞き捨てならない噂が》

近頃にあすや、

《チカグルニ アスイヤ…最近、頻繁に聞えるのは》

気掛な事よ

《チガケーナ クトウユ…気掛りな事で》

心配事どやよる。

《シワグトウドウ ヤユル…心配な事だな。》

湧田 あんやさ、外間。

《アンヤサ フカマ…そうだな、外間。》

御内原をての

《ウウチバラ ヲウテイヌ…御内原での女官たちの
たわふれの噂、

《タワフリヌ ウワサ…つまらぬ噂だろうが、》
わした下役の

《ワシタ シタヤクヌ…我々のような下つ端役人が》
構ていぢゃなゆが。

《カムテイ イチャナユガ…関わっても仕方がない。》
流れ走り失せる

《ナガリハキ ウシル…空を流れて消え失せる》
白雲どやゆる。

《シラクムドウ ヤユル…白雲のようなものだ。》

外間 やすが、湧田。

《ヤスイガ ワクタ…それはそうだが、湧田。》

火種あてからど

《フィダニ アテイカラドウ…火種が有るから》

煙立つためし、

《チムリタツ タミシ…煙も立つ例しと言うもの。》

西のあざなをて

《ニシヌ アザナヲウテイ…西のアザナで》

真乙樽加那志と、

《マウトウダル ガナシトウ…王女の真乙樽様と》

龍魁さまが

《リュウカイ サマガ…国王様御側役の龍魁様が》

二人愛がなと、

《フタキ カナガナトウ…二人で親しそうに》

語らゆる姿

《カタラユル スイガタ…語り合っている姿を》
私達同僚も、

《ワシタ イエージュウン…我々の同僚も》

しかと見届けて

《シカトウ ミトウドウキテイ…しかと見届けて
た旨を》

上役に告げたん。

《ウイーヤクニ ツイギタン…上役に報告したのだが。》

やすいが 湧田、

《ヤスイガ ワクタ…だけど、湧田よ。》

不思議事あらね。

《フシギグトウ アラニ…不思議な事ではないか、》

事そのままに

《クトウヌ ウヌママニ…この件が、うやむやに》

やい居すや。

《ナヤキ フウスイヤ…なっている事は。》

湧田 やあ、外間。

《ヤア、フカマ…これ、外間よ。》

不思議ごとやても

《フシジグトウ ヤティン…不思議な事であろうと》

珍らしやよあても、

《ミズイラシヤユ アティン…珍らしかろうと、》

わした下々の

《ワシタ シムジムヌ…我々如き下つ端が》

口や挟らぬ。

《クチャ ハサマラン…口を出す事は出来ないのだ。》

物盗りもあらぬ

《ムヌトウキン アラン…物盗りでもなく》

刃傷もあらぬ、

《ニンジョー ンアラン…刃傷沙汰でもない、》

人騙ち世間

《フィットウダマチ シキン…人を騙して、世間を》

騒がちも居らぬ。

《サワガチン フウラン…騒がしてもいないのだが》

恋の三つ巴

《クキヌ ミツイドウムキ…恋の渦巻き三つ巴》

是もまた戦、

《クリンマタ イクサ…是もまた、戦だな。》

王女と婚約たる

《ウミナイビトウナジキタル…王女様と婚約している》

平田里之子と、

《フィラタ サトウヌシトウ…平田里之子虎千代さまと、》

国王御肝入り

《ククヲウ ウチムイリ…国王様のお気に入り御側役》

才人琉魁。

《スグリムン リユウカイ…優れ者、久米村の龍魁。》

さて、さて、

《サテイ、サテイ…さて、さて。》

如何がなて行ゆら。

《イチャガ ナテイイチユラ…如何が相成ることやら。》

たうたう、外間。

《トートー フカマ…さあ、さあ。外間よ。》

なあ、一廻り

《ナアー チュミグキ…もう、一廻り》

めぐて見だな。

《ミグテイ ンダナ…見廻つて見よう。》

外間 あんやさ、湧田。

《アンヤサ ワクタ…そうだな、湧田。》

たうたう。

《トウトウ…さあ、さあ、》

此処に長ゆくい

《クマニ ナガユクキ…ここで休み過ぎては》

ゆんたくの長さ、

《ユンタクヌ ナガサ…無駄話が長いと》

上役の比嘉に

《ウィーヤクヌ フィジャーニ…上役の比嘉に》

目光らりさ。

《ミー フィチャラリーサ…叱られるぞ。》

たうたう急ぎ通ら。

《トートー イスジトウーラ…さあ、さあ、

急いで見廻ろう。》

（警護の役人、湧田と外間は、辺りを見廻しながら「早口説の歌持ち」に合わせて下手に退場）

《 第 四 場 》

重陽の節も過ぎた陰暦九月十五日、満月の月が雲の間から見え隠れしながら西のアザナを照らし「瓦屋節の歌持ち」が流れている。下手から王女の婚約者の平田里之子が登場し、後ろ向きに立ち城下を眺めている。そこに、上手から王女真乙樽が登場し平田に気付く、一瞬ためらうが意を決したように平田に近づく。

真乙樽

やあ、虎千代。

《ヤア、トウラジュー…ねえ、虎千代。》
度々の呼ばし

《タビタビヌ ユバシ…度々のお呼びだが》
御状までも遣かて、

《グジヨマディン ツイカテ…お手紙まで遣わして》
話の筋や

《ハナシヌ スイジヤ…話の筋、用件は》
何事がやゆら。

《ヌウグトウガ ヤユラ…何の事ですか。》
是までの如の

《クリマディヌ グトウヌ…是までのような》
繰り言よやはらは、

《クリグトウユ ヤラワ…繰り言でしたら、》
我が肝や今も

《ワガチムヤ ナマン…私の心は、今でも》
変わる事無らぬ。

《カワルクトウ ネラン…変わっておりません。》
御主加那志前と

《ウシユガナシ メートウ…父国王様と》
里前親加那志、

《サトウメ ウヤガナシ…貴方のお父様の》
御二人の心

《タトウクルヌ ククル…御二人の心は。》
誰よりも増さて、

《タルユイン マサテイ…誰にも増して》
知りなきな我身の

《シリナギナ　ワミノ…身に染みて知っている私が》
義理の道背く。

《シリヌミチ　スムク…その義理に背いているのです。》
女身や哀れ

《フィナグミヤ　アワリ…女の身は哀れなもの》

我が身しち我肝、

《ワガミシチ　ワチム…自分で自分の心を》

取合せもならぬ

《トウヤーシン　ナラン…整えることさえも》

鎮めまたならぬ。

《シズイミマタ　ナラン…鎮める事も出来ないのです。》

籬内に育ち

《マシウチニ　スダチ…城内で育った私の》

ただ自儘あらぬ、

《タダジママ　アラン…ただの我俣ではないのです。》
肝に正直に

《チムニ　ショウジチニ…自分の心に正直に》

生ち見ぼしや。

《イチチ　ミブシャ…生きて見たいのです。》

たんで我が心

《タンデイ　ワガククル…どうか私の心を》

わかつてたばうれ。

《ワカテイ　タボリ…解かってください。》

平田　やあ、王女様。

《ヤア、ウミナイビヌメー…王女さま。》

幼少の頃から

《ユウスウーヌ　クルカラ…幼少の頃から》

越来をてともに、

《グイークヲテイ トウムニ…越来のお城でいつも》

御側をて拜で

《ウスバヲウテイ ヲウガデイ…御側に居て》

慣れ染たる我身や、

《ナリスダル ワミヤ…慣れ親しんで来ましたわたしは、》

真乙樽加那志

《マウトウダル ガナシ…真乙樽さまの》

胸内の苦しや、

《ムニウチヌ クリシャ…胸中のお苦しみは》

誰よりも増さて

《タルユイン マサテイ…誰にも増して》

知りなげな居とて、

《シリナギナ ヲウトウテイ…よく知っています。》

御主加那志仰せ

《ウシユガナシ ウイーシ…私は、国王様の仰せと》

親の御ところに、

《ウヤヌ ウククルニ…親の御心に》

背くことならぬ

《スムククト ナラン…背くことは出来ません。》

忘る事ならぬ。

《フスイルクトウ ナラン…無視することも赦されず》

義理のしがらみに

《ジリヌ シガラミニ…義理のしがらみに》

責められる我肝、

《シミラリル ワチム…責められる私の心も》

思わかてたばうれ

《ウミワカテイ タボリ…お察し下さい。》
真乙樽加那志。

《マウトウダルガナシ…真乙樽さま。》

真乙樽

やあ、虎千代。

《ヤア、トウラジュー…ねえ、虎千代。》

乱世の哀れ

《ミダリユヌ アワリ…乱世に生まれた哀しさ。》

踏揚り御姉や、

《フミアガリ ウンミーヤ…百十踏揚り御姉様は》

勝連の按司の

《カツイリンヌ アジヌ…勝連按司の》

をなじやらに降て、

《ヲウナジヤラニ ウリテイ…御妃になられた。》

夫の阿麻和利が

《ヲウトウヌ アマワリガ…夫の阿麻和利が》

祖父護佐丸と、

《ファーフジ グサマルトウ…祖父の護佐丸と、》

敵味方なやひ

《テイチミカタ ナヤキ…敵、味方になつて》

争たる為に、

《アラスタル タミニ…争つた為に》

中城按司や

《ナカグスイク アジヤ…祖父の中城按司は》

阿麻和利に討たれ。

《アマワリニ ウタリ…夫の阿麻和利に討たれた。》

踏揚り御姉

《フミアガリ ウンミー…踏揚り姉上さまの》

夫の勝連や、

《フウトウヌ カツイリンヤ…夫君の阿麻和利は、
首里加那志御手に

《シュキガナシ ウテイニ…首里の国王様の御手に》
掛かて滅ぼされ。

《カカテイ フルブサリ…掛かって滅ぼされた。》
命からがらに

《イヌチ カラガラニ…命からがらに》
勝連よ逃がれ、

《カツイリンユ ヌガリ…勝連を逃がれて、》
首里の御城に

《シュキヌ ウグスイクニ…首里の御城に》
戻って又来やすが。

《ムドウテイ マタチャスイガ…戻って来たのですが、》

自由ならぬ縁に

《ジュナラン キンニ…自由にならない縁に》
またも繋がれて、

《マタン ツィナガレテイ…又も繋がれている》
女身のいちやさ

《キナグミニ イチャサ…女の身は可哀相なもの。》
愛し御姉や、

《カナシ ウンミーヤ…愛しい姉上様は》
無情のこの浮世

《ムジョウヌ クヌウチユ…無情なこの浮世を》
只堪て来ちやる。

《タダテーテイ チチャル…只、堪えて来たのです。》
やあ、虎千代。

《ヤア トウラジュー…ねえ、虎千代。》

女身やても

《キナグミヤ ヤテモ…女の身であっても》

無常のこの世界に

《ムジョヌ クヌシケニ…無常な此の世界であらうと》

我が命自由に

《ワガイヌチ ジユニ…自分の命を自由に》

生ち見ぼしや。

《イチチ ミブシャ…生きて見たいのです。》

平田 やあ、真乙樽加那志。

《ヤア マウトウダルガナシ…やあ、真乙樽様。》
こころ穏やかに

《ククル ウダヤカニ…穏やかに心を落ちつけて》
御聞留めめしやうれ。

《ウチチトウミ ミシヨリ…お聞き留めください。》
今の言葉や

《ナマヌ イクトウバヤ…今のお言葉は》
我肝ひしひと、

《ワチム ヒシヒシトウ…私の心に深く響き》
胸中の思い

《ムニウチヌ ウムキ…王女としての胸中の思い》
女身の哀れ、

《フィナグミヌ アワリ…女としての哀しさ。》
聞けば肝苦しや

《チキバ チムグリシャ…お聞きすれば心苦しく》
気の毒な事よ。

《チヌドウクナ クトウユ…お気の毒な事です。》
やしが、また。

《ヤシガ マタ…そうではありますが、》
親加那志御心

《ウヤガナシ ウククル…父親の御心》

首里加那志仰せ、

《シユキガナシ ウィーシ…国王様の仰せを》

背き背かれめ

《スムチ スムカリミ…背くことは赦されません》

義理のしがらみの、

《ジリヌ シガラミヌ…義理のしがらみから》

解やひ逃げられる

《トウチャキ ヌギラルル…解かれて逃げおおせる》

道や無やべらぬ。

《クトウヤ ナヤビラン…道は無いのです。》

真乙樽

やあ、虎千代。

《ヤア、トウラジュー…ねえ、虎千代。》

我身も御姉と

《ワミン ウンミートウ…私も姉上様と》

えの道よ歩で、

《キヌミチユ アユデイ…同じ道を歩んで、》

御城のならい

《オグスイクヌ ナライ…御城の慣習に従い》

女身のつとめ、

《フィナグミヌ ツイトウミ…女のつとめを守り。》

背からぬ義理の

《スムカラン ジリヌ…背くことの出来ぬ》

浮世しがらみに、

《ウチユ シガラミニ…浮世のしがらみに、
思い塞がれる

《ウムキ フサガリル…自分の思いは閉され
儘ならぬ運命。

《ママナラン サダミ…儘にならない運命。》
何の為に我身や

《ヌヌタミニー ワミヤ…何の為に私は》
此世生まれたが、

《クヌユ ンマリタガ…此の世に生まれたのですか。》
あだし我が心

《アダシ ワガククル…虚しい我が心を》
誰と語らゆが。

《タルトウ カタラユガ…誰に語れば良いのですか。》

首里森の御神

《シュユムイヌ ウカミ…首里森の神様》

御月様加那志、

《ウチチウーメ ガナシ…天上におわすお月様》

ご慈悲あて此の身

《グジファイアティ クヌミ…どうか御慈悲でこの私を》

抱きやひたばうれ。

《ダチャキ タボリ…抱きしめて下さい。》

平田（つらね）

哀れ王女様

《アワリ ウミナイビ…可哀相な王女さま》

生まれたる因果。

《ンマリタル イングワ…王女に生まれた因果。》

背く事ならぬ

《スムククトウ ナラン…背くことの赦されない》

義理のしがらみに、

《ジリヌ シガラミニ…義理のしがらみに、》

思い塞がれる

《ウムキ フサガリル…我が思いは閉ざされてしまう》

悲しさだめ。

《カナシ サダミ…悲しい運命だ。》

音曲 「揚七尺節」（真乙樽の踊り）

思い塞がれる

《ウムキ フサガリル…我が思いは塞れてしまう》

悲し運命

《カナシ サダミ…悲しいさだめ。》

（真乙樽の踊りが終わる直前に、衝撃的な琴の演奏が「揚七尺節」の歌にかぶさる。人の気配を感じた真乙樽は、踊りを止めて上手奥に逃げるように退場。女下手から龍魁が登場、その場に異様な空気がながれる。）

龍魁 これや龍魁。

《クリヤ、リュウカイ…私は、龍魁。》

やあ、虎千代。

《ヤア、トラジュー…やあ、虎千代。》

時遅くなたん。

《トウチウスク ナタン…時が遅くなったのだ。》

国王様から

《ククオウサマカラ…国王様からの》

只今のお呼び、

《タデーマヌ ウユビ、…急ぎのお呼びですぐに参上し。》
明国皇帝

《ミングク コウテイー…明国の皇帝》

英宗帝からの、

《エイソウテイ カラヌ。…英宗帝からの、》

火急の書状の

《クワチュウヌ シュジョウヌ…火急の書状が》

早船し届き、

《ハヤフニシ トウドウチ、…早船で届いたので、》

読みあげて意見

《ユミアギテイ イチン…読み上げて建言》

言上拝んで。

《グンジョウ ヲウガムンデイ。…言上申し上げる為に、》

約束の時刻

《ヤクスクヌ ジクク…約束の時刻を》

違て今なたる。

《タガティ ナマナタル。…違え今になってしまった。》

やしが、虎千代。

《ヤシガ、トウラジュー。…ところで、虎千代。》

如何る事あとて

《イチャルクトウ アトウテイ…何ごとがあつて》

此処に呼び出すが。

《クマニ ユビジャスガ。…ここに呼び出したのだ。》

平田 あんやさ、龍魁。

《アンヤサ リユウカイ。…そうだな、龍魁。》

この様な時刻

《クヌヨウナ ジクク…こんな時刻に》

此の様な場所、

《クヌヨウナ トウクル…このような場所に、》

呼び出すばかり

《ユビンジャス バカリ…呼び出すのだから》

別事やあらぬ。

《ビチグトウヤ アラン…別の話ではない。》

うすうすや胸に

《ウスウスヤ ムニニ…お前も胸中では薄々》

察しあるつもり。

《サツシアル ツイムイ…察しているであろう。》

此の際になてや

《クヌチワニ ナテイヤ…この際になつては》

ただ隠ち置きや、

《タダカクチ ウチャ…ただ隠して置いては、》

真乙樽ためも

《マウトウダル タミン…真乙樽の為にも》

我が為もならぬ。

《ワガタミン ナラン…私のためにもならない。》

やてど、龍魁。

《ヤティドウ リユウカイ…それで、龍魁。》

正直に胸内

《ショウジチニ ムニウチ…正直にお前の心中を》

聞かち取らせ。

《チカチ トウラシ…聞かせて呉れ。》

龍魁

先ず待て、虎千代。

《マズイマテイ トウラジュー…先ず待つてくれ、虎千代。》

やあ、虎千代。

《ヤア トウラジュー。…やあ、虎千代。》

越来の城から

《グイクヌ シルカラ…越来城の頃から》

互に肩並べ、

《タゲニ カタナラビ、…互に肩を並べ、》

尚泰久王に

《ショウタイキユウヲウニ…尚泰久王に》

御使え拜で。

《オツイケー ヲウガデイ、…お使えして来た。》

あの頃や二人

《アヌクルヤ フタキ…その頃は二人とも》

何の隔て無いらぬ。

《ヌウヌファイダテイ ネラン。…何の隔ても無かった。》

王女様も

《ウミナイビヌメーン…王女さまとも》

互に語たすが、

《タゲニ カタタスイガ、…互に語らったものだが。》

今や、真乙樽加那志

《ナマヤ マウトウダルガナシ…今では、真乙樽様は》

自儘どくめしやうち。

《ジママ ドウクミシヨチ。…あまりにも、我儘になられて。》

（龍魁、言葉に詰まる。）

平田 やあ、龍魁。

《ヤア、リュウカイ。…やあ、龍魁。》

真乙樽じまま

《マウトウダル ジママ…真乙樽が自儘という事は》
如何る事やよが、

《チャネル クトウヤユガ…どの様なことなのだ。》

御主加那志御心に

《ウシユガナシ ウククルニ…国王様の御心に》

背くことあらね。

《スムククトウ アラニ…背く様な事ではないだろう。》

若しや、

《ムシヤ、…若しや、》

肝心よそに

《チムククル ユスニ…他の男に心を》

惑わされ…。

《マドウワサリ…。…惑わされているとか…。》

（龍魁の心の衝撃を表現するような音曲。絞ってBGM的に暫らく続く。）

龍魁 やあ、虎千代。

《ヤア、トウラジュー…やあ、虎千代。》

佐敷上城

《サシチ ウイーグスク…佐敷上城の時代から》

今や首里城、

《ナマヤ シュキグスイク…現在の首里城まで、》

尚巴志王から

《シヨウハシヲウ カラ…尚巴志王様から》

御抱えよ拝む。

《ウカケエーユ ヲウガム…御抱えを賜っている、》

平田一門の

《ヒラタ イチムンヌ…平田一門の》
嫡子虎千代に、

《チャクシ トウラジューニ…総領の虎千代に、》
何不足あゆが。

《ヌウ フスクアユガ、…何の不足があるなた。》
否、ある筈や無らぬ。

《イヤ、アルハズイヤネラン。…否、ある筈がないでは無いか。》
由緒ある血統

《ユイシユアル チスジ…由緒ある家柄だ》
斟酌や無用。

《シンシヤクヤ、ムヨウ。…斟酌の必要も無い。》
真乙樽加那志

《マウトウダルガナシ…真乙樽さまの》
一時の気任せ、

《イットウチヌ チマカシ…一時の気任せだろう。》
心配事や無いらぬ

《シワグトウヤ ネラン…心配する事はない》
たう、肝居して語ら。

《トウ。チムキシテイ カタラ…さあ、心落着けて話そう。》
肝居して我身の

平 田

《チムキシテイ ワミヌ…心を落ち着けて》
胸内の苦れしや、

《ムニウチヌ クリシャ…この胸の苦しさを、》
男義理恥の

《フウトウク ジリハジヌ…男の義理と恥を》
いきやす語られが、

《イチャスイ カタラリガ…如何にして語れと言うのだ。》

御臣下のつとめ

《ウシンカヌ ツイトウミ…臣下としての義務を》
背むき背かれぬ。

《スムチ スムカリミ…どうして背く事が出来ようか。》
王女様御婿に

《ウミナイビ ウムークニ…後々には王女様の婿にと》
御取り立て拜で、

《ウトイタテイ ヲウガデイ…特段の御取立てを賜わり、》
この身や一分

《クヌミヤ イチブン…この身は自分一分のものではない》
我がものやあらぬ。

《ワガムヌヤ アラン…自分で自由になる身ではない。》
やしが、龍魁。

《ヤシガ リユウカイ…ところが、龍魁。》

真乙樽こころ

《マウトウダル ククル…真乙樽の心は》
我が側よ離れ、

《ワガスバユ ハナリ…私から離れてしまい、》
余所に肝迷て

《ユスニ チムマユテイ…他の男に心は迷い》
義理も振り捨てる、

《シリン フリスイテイテイ…義理も振り捨てる》
此の頃のしざま

《クヌグルヌ シザマ…此の頃のふるまいは》
常の事あらぬ。

《ツイニヌクトウ アラン…決して尋常ではない。》
やあ、龍魁。

《ヤア、リユウカイ…やあ、龍魁。》

城内の噂

《シルウチヌ ウワサ…城内での噂を》

知らぬ筈ないらぬ。

《チカンハズイ ネラン…知らない筈はなからう。》

誠やめ、あらね

《マクトウヤミ アラニ…誠の事か、そうではないのか》

聞かちとらせ。

《チカチ トウラシ…教えて呉れ。》

(暫らく間がある)

龍魁 やあ、虎千代。

《ヤア、トウラジュウ…やあ、虎千代。》

この際になとて

《クヌチワニ ナトウテイ…事がここに到って》

のよで事隠くす。

《ヌユデイ クトウカクス…どうして隠せようか。》

今宵照る月に

《クユキティル ツイチニ…今宵照る重陽の月に》

誓て語ゆすが。

《チカテイ カタユスイガ…誓って話すが》

実えー…

《ジツエー……実は…》

城内の噂あー…

《シルウチヌ ウワサア……城内での噂は……》

平田 城内の噂あー…？

《シルウチヌ ウワサア……城内での噂は……？。》

（間を取る）

龍魁 城内の噂あー

《シルウチヌ ウワサア…城内での噂は》

誠：実やゆん。

《マクトウ：ツイチャユン…誠、事実なのだ。》

（衝撃的な、琴、笛の音で緊迫感を出す。）

龍魁 やあ、虎千代。

《ヤア、トウラジュー…やあ、虎千代。》

この様なしざま

《クヌヨウナ シザマ…この様な振る舞い》

ことわけも無いらぬ。

《クトウワキン ナラン…言い訳は出来ない。》

義理背く咎や

《ジリスムク トウガヤ…義理に背く罪咎は》

我身に又あれば、

《ワミニマタ アリバ、…私に有るのだから。》

真乙樽加那志

《マウトウダルガナシ…真乙樽さまを》

苦しめて呉るな。

《クルシミテイ クイルナ…責めて呉れるな。》

平田 やあ、龍魁。

《ヤア、リュウカイ…やあ、龍魁。》

今になっていきやす

《ナマニナティ イチャスイ…此の期に及んで如何にして
我肝とり直ち、

《ワチム トウキノーチ、…自分の心を昔に戻し、》

真乙樽ころろ

《マウトウダル ククル…真乙樽の心を》

抱き留めのなよが。

《ダチトウミヌ ナユガ…抱留める事が出来ると言うのだ。》

御主加那志様と

《ウシユガナシイメー トウ…国王さまの御心》

父親に背き、

《チチウヤニ スムチ、…父親の期待に背き、》

生き恥ゆ晒らち

《イチハジユ サラチ…生きていて恥を晒してまで》

永えて居られよめ。

《ナガラキティ ヲウラリユミ…此の世に永らえて

居れようか。》

とう。やれば龍魁。

《トウ。ヤリバ、リユウカイ…さあ、龍魁。それよりも》

読谷山から互に

《ユンタンザカラ タゲニ…読谷山の頃からお互いに》

嗜たる武術。

《タシナダル ブジイ…武術を嗜んで来た。》

太刀技の手並み

《タチワザヌティナミ…その、剣の手並みを》

今宵立合うて、

《クユキ タチオーティ、…今宵は二人で立ち合い、》

肝晴らち見だね

《チムハラチ　ンダニ…気持ちを晴らそうではないか》
互にこと忘れ。

《タゲニ　クトウワスイラ…俗世の煩わしいさを忘れよう。》

龍魁　あんやさ、虎千代。

《アンヤサ　トウラジュウ…そうだな、虎千代。》
久々に手合わせ

《ヒサビサニ　ティアワシ…久々の手合わせだな》
身震いどしゆゆる。

《ミブリードウ　シュユル…身震いがするぞ。》
真剣の立合い

《シンケンヌ　タチエー…真剣での立合いでも》
異存無いらね。

《イズン　ネラニ…異存は無いな。》

平田　我身もまた同意。

《ワミンマタ、ドウイー…それは、私も同意だ。》
たう、龍魁。

《トウ、リュウカイ…では、龍魁。》
さやか照る御月に

《サヤカテイル　ツイチニ…さやか照る御月様に》
御立合い頼ま。

《ウタチエーヲウガマ…立合いを御願いしよう。》

（十五夜の月が西のアザナを照らし、静寂の中に笛の音に重なって微風が吹く、二人の立合いとなる。平田は上手に龍魁は下手に静かに歩み、相対して刀を抜く。二人が刀を構えると、俄かに月に雲がかかり場面は薄暗くなり、斬り合いがはじまる。斬り合いになると俄かに、雷鳴

と稲妻の閃光か走る。暫らく双方が斬り合い、平田が龍魁の左腕に切り込み、龍魁は刀を落としその場で、左手を抱えるように倒れ込む。すでに平田も龍魁の刀刃で、左肩から胸に袈裟斬りに大きな傷を負っている。龍魁が倒れ込むと平田は茫然自失の状態で立っている。すると、その一瞬、突然、雷鳴が大きく響き、稲妻の閃光が光る。同時に平田が異様な悲鳴をあげて、刀を投げ捨てるようにその場にドツとくずれる（雷に打たれる）。はっと、気がついた龍魁が平田の亡骸にいざり寄り、平田を抱き抱え号泣する。）

龍魁 虎千代。虎千代。

《トウラジュー、トウラジュー…虎千代。虎千代。》
死じえーならぬ。

《シージェーナラン。…死んではならん、しっかりしろ。》
此の際に龍魁

《クヌチワニ リユウカイ…此の立合いで、この龍魁が》
先ならんともて、

《サチナラン トウムテイ…先に死のうと思って、》
肝心定め

《チムククル サダミ…こころを決めての》
立合いの積もり。

《タチイエーヌ ツイムイ…立合いの積りだったが。》
徒にこの身

《イタズイラニ クヌミ…意に反し、自分の命が》
後に残されて。

《アトウニ ヌクサリテイ…生き残ってしまった。》
やあ、虎千代。

《ヤア、トウラジュー…虎千代。》
やあ、虎千代…。

《ヤア、トウラジュー……。..なあ、虎千代。》
先になて行けば

《サチニナテイ イキバ…お前が先に行けば》
真乙樽加那志、

《マウトウダルガナシ…真乙女樽様は》
是からの先や

《クリカラヌ サチヤ…これから先》
如何なて行きゆが。

《イチャナテイイチュガ…どうして生きて行くんだ。》
やあ、虎千代……。..

《ヤア、トウラジュー……。..おい、虎千代。》

（雷鳴も静まり月も少し明るくなっている。静かな琴の音が流れる。下手から、城内警護の役人比嘉と下役の外間、湧田が慌てて登場、そ

の場の状況に驚く。同時に上手から王女の真乙樽が出てくる。異様な場面に立ちすくむ。「東江節」の歌と同時に、平田の側に駆け寄り亡骸に取りすがる。）

音曲「東江節」

あゝけ、

《アーキイ、..ああ。》

いきやがなよら。

《イチャガナユラ..どうなて行くのなだろ。》

（東江節が歌い終わると、静かに笛の演奏、曲は「子守節」、その場で立膝になり、首里森御嶽の方角に向いて、台詞（つらね）になる。）

真乙樽（台詞・つらね）

首里森の御神

《シュキムキヌ ウカミ…首里森の神さま》

まささ神加那志、

《マササカミガナシ…霊験あらたかな神様。》

もの悟りすれの

《ムヌサトイキ スイリヌ…物事を悟りなさいとの》

御告げごとやれば、

《ウツイギグトウ ヤリバ…お告げ事でしたら、》

背きそむかれめ

《スムチ スムカラン…背くことは致しません》

自儘ゆるされめ。

《ジママ ユルサリミ…自儘もお赦しは無いでしょう。》

女身のあわれ

《ヲイナグミヌ アワリ…女の身は哀しく》

無常の此のさだめ。

《ムジョヌ クヌサダミ…無常のさだめですね。》

肝迷ひしゆても

《チムマユキ シュティン…心迷うことがあつても》

御神忘やべめ。

《ウカミ ワシヤビミ…神様を忘れては居りません。》

里や里生まれ

《サトウヤ サトウンマリ…あの方はあの方の生き方》

我身や我身生まれ。

《ワンヤ ワンンマリ…私は私の人生でした。》

十五夜の月や

《ジュウグヤヌ ツイチャ…十五夜のお月様は》

変わることはないさめ。

《カワルクトウ ネサミ…変わる事はありませんが。》

あだし此の浮世

《アダシ クヌウチユ…はかないこの浮世は》

まどろみゆる間の、

《マドウルミユルウエダヌ…暫しまどろむ間の》

哀れ秋の夜の

《アワリ アチヌユヌ…はかない秋の夜の》

夢がやたら。

《ユミガ ヤタラ…夢であつたのだろうか。》

音曲「散山節」

あだし此の浮世

《アダシ クヌウチユ…はかないこの浮世は》

まどみゆる間の、

《マドウルミユル ウエダヌ…暫しまどろむ間の、》

哀れ秋の夜の

《アワリ アチヌユヌ…はかない秋の夜の》

夢がやたら。

《ユミガヤユラ…夢であつたのだろうか。》

（散山節の上句で、城内警護役人の比嘉の指示で、下役の二人が龍魁に縄を打ちゆつくりと下手に退場する。それを見送る真乙樽、浮世の無常、運命のはかなさを思い知らされる。下句で真乙樽は静かに立上がり踊る。舞台の中央のあたりから、虎千代のそば近くで踊りが終わる。立っている真乙樽と倒れている平田に二つのスポットが当たる。やがて静かに暗転。）

《
完
》